

説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

今日の箇所のテーマは一見、「貪欲」ということのように思えますが、その先に、全ての命の創造主であり支配者であられる神様へと目を向けるように、私たちはこの朝、促されているのです。

最初に遺産問題について主イエスに願いを訴えた者がいました。それは尤もなことでした。当時のラビと言われた律法学者たちは、律法の解釈と適用が専門でしたし、旧約の律法には、今で言う民事的なものが沢山含まれていたからです。

しかし、普段は優しい主イエスがそれを言下に断っています。なぜなら、今、主イエス達一行はエルサレムへの途上にあるからです。主イエスは「なくてはならないものは唯一つである」と語られたそのことを命を賭けて証しするために、そして今、福音に生きることを伝えるためにこそ来られたからであります。

この愚かな金持ちの譬えと呼ばれる箇所を直訳してみますと面白いことに気づきます。新共同訳では訳出されていませんが、ほぼ全てに「私が」「私の」という言葉がしつこい位にくっついているのです。例えば17節の「思い巡らす」は「(自分の) 心の中であらう」とあり、「作物」は「私の作物」であり、18節の「倉」は「私の倉」であり、「穀物や財産」は「私の穀物や財産」です。

そして何よりもここで語られている言葉は、相手不在の「自分の魂」に向かったの独り言に他なりません。つまり、これから先ずっと「食べたり飲んだりして楽しむ」のは、「私だけの世界」であって、ここには隣人や共に働いた同労者や神様が入り込む余地が全くないのです。この男は賢く勤勉だったに違いない。だからこそ財を築くことが出来た。しかしその愚かさは完全なエゴイズムの世界に生きている、その罪の姿の中にあります。

愚かな金持ちは、自分の力によって一生分の糧を得たと喜び、「さあ安心して、食べ、飲め、楽しめ」と自分自身に語るのです。この「楽しめ」は「大いに喜べ」という言葉です。ある説教者は、この男は自分の魂に今、説教していると語ります。説教とは福音、喜びの知らせです。わが魂よ、もうあくせく心配せずに生きる時が来た。安心してよい。そう自分に語っていると言うのです。

しかしここで、自分の財産だけを喜びの根拠、安息の根拠としている男に対して、神の声が響くのです。

「愚かな者よ、倉庫一杯の財産に喜ぶ者よ、お前の財産がどれほどあろうと、今夜起こるあなたの死に対して、それがどんな力、意味を持つというのか」と。

ここで間違っはいけないのは、死んでしまったらお仕舞いよ、あの世には財産は持って行けない、結局みんな死んでしまうのだからこの世の富や努力は意味がない、ということではないということです。主が語りになるのは死ではなく命です。つまり、命は本当は何に根ざしているのかということです。



問題は死ぬことではなく、死を越えてなお私たちに与えられている命とは何かということなのです。21節にある「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者」とは、そのことを見失っている者のことなのです。主イエス・キリストはそのような私たちに真実の富とは何か、その富に生きる生き方、神に対して豊かになる生き方があるではないか。そのことを忘れないでほしいと語っているのです。

私たちは毎週の礼拝の最後にヌンク・ディミティスを歌います。これは幼子イエスと出会うことが出来た、老人シメオンの救いの喜びが歌われています。そして救いを見た今こそ、私は安らかにこの地上の生を終えることが出来ると讚美するのです。私たちもこの礼拝を通して、そのような恵みに与っているのです。

牧師は、今日語る説教が、ある人にとって最後の説教になるかもしれない、という緊張をもっていつも語っています。同じように、聞いている皆様もこの説教がご自分にとって最後の説教だと思って耳を傾けられたなら、きっとこれまで以上のみ言葉の響きを聴き取ることが出来ることでしょう。

本日の福音書の結びは、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」という言葉です。この「神の前に」という言葉は、原語では「神の中へ」という言葉です。私たちが何か優れた者になったり、功德を神様の前に積んだりするのではない。ただただ神様の懐の中に包まれることで与えられる豊かさであり富なのであります。そのために主イエスは十字架におかかりになり復活して下さったのです。

神に対して豊かな生き方とは何か？

それは神さまの御前に立った時に、神さまの眼差しの前に立った時に、恐れではなく喜びをもって立つことができる生き方です。

それは信仰の中に「生き甲斐」を見出す生き方であると同時に、「死に甲斐」をも見出す生き方です。神に対して富むということは、死に打ち克つ復活の恵みに生きるということだからです。命の根源である神さまの前で、「神よ、あなたが与えて下さった尊い命を、このように喜びをもって生きてきました」と言える生き方は、いつでも死に備えて生きる生き方と重なっています。

「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。」（Iペトロ 1章 3~5）

この福音の中に、私たちもまた既に入れられている。そのことを改めて感謝をもって覚えつつ、ご一緒にヌンク・ディミティスを心から讚美致しましょう。



十 望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満らし、
聖霊の力によって、あなたがたを望みにあふれさせて下さるように。アーメン